



「寿式三番叟」 旭座人形芝居保存会

能の「翁」を人形浄瑠璃に取り入れ、景事物として上演する儀式の舞が「寿式三番叟」です。旭座では、お米や

お茶などの収穫に対する五穀豊穰と、息災延命を願い、毎年1月20日の「初光り」と、7月15日の「翁渡し」による「座渡し神事」が継承されています。

右手に神鈴、左手に扇子を持ち、矚時きをイメージした躍動感あふれる動きで四方を清めます。黄金の稲穂が垂れるよう篩から次々と粃を蒔きながら、くまなく舞台を駆け回り、皆様のご健勝とご多幸を祈念します。



「傾城阿波鳴門」巡礼歌の段

八女市立黒木小学校人形浄瑠璃クラブ

阿波の国・徳島藩で、名刀・国次が何者かに奪われる事件が起きる。藩士・十郎兵衛は、この刀を取り戻すため、盗賊銀十郎として、女房のお弓とともに浪速に住んでいた。その上、夫の十郎兵衛は、今日中に五十両の金子を用立てなければならない事情にあった。

ちょうど、金策で夫が留守のところへ、巡礼姿のかわいらしい女の子がご報酬に訪れる。お弓が身の上を聞くと、国は阿波の徳島、父の名は十郎兵衛、母はお弓と答えた。それは紛れもないわが娘、お鶴だったのだ。

お弓は娘に災いが及ぶことをおそれ、母と名乗りたい気持ちをぐっところえるが、お鶴は「小さい時に別れて親の顔もはっきりと覚えがなく、よその子たちのように、母さんに髪を結ってもらいたい」と泣き出してしまふ。お弓も涙をこぼしながら、お鶴の身を案じ、徳島へ帰るように諭す。

そんなお弓に、「あなたが母さんのように思えてきました。何でもしますからここに置いてください」とお鶴は懇願するが、置いてやることはできない。お弓が帰りの旅費を渡そうとすると、お鶴は小判をもっているので心配ないと告げる。わが娘のいじらしさに打たれ、自分の髪で髪を結い直し、泣く泣くお鶴を送りだしたお弓。しかし、このままでは二度と会えないと、連れ戻す決心をしてお鶴の後を追いかけていくのだった。

「傾城阿波鳴門」十郎兵衛住家の段 旭座人形芝居保存会

「傾城阿波鳴門」の作者は近松半二。1768年に初演された。本来は全十段構成だが、八段目の「十郎兵衛内の段」を前後半に分け、現在では前半を「巡礼歌の段」として上演されることが多い。旭座では後半の「十郎兵衛住家の段」を上演し、黒木小学校の前半と合わせて、八段目が同時上演されるのは10年ぶりとなる。

(あらすじ)

日暮れの鐘が鳴るころ、十郎兵衛は巡礼の娘を連れて帰ってくる。それが実の娘のお鶴とも知らずに…

お弓の不在をいぶかりつつも、たばこ盆を据えて腰を下ろした十郎兵衛は、娘をそばに寄せ「金を持っているのか」と尋ねる。娘が正直に「小判を持っている」と答えると、武太六から借りた五十両の返済期限がせまっていた十郎兵衛は、少しでも返済の足しにしようと考えた。「この辺りは不用心なので自分が預かってやろう」と騙しかけるが、娘は「財布の中には大事なものが入っているので人に見せるな、とばばさんに言われた」と拒んで逃げようとする。娘をつかみ「こわいこわい」と泣く声が外に漏れるのを恐れて、十郎兵衛は娘の口をおさえると、「二三日でいいから貸してくれ」と言っているうちに、やがて娘は息をしなくなってしまった。

「可哀そうなことをした」と娘を布団に寝かせたところで、お鶴を見失ったお弓が息せききって戻ってきた。「国元からお鶴がやってきたのに追い出してしまった。一緒に探してくれ」と頼み込むお弓。十郎兵衛も慌ててお鶴の年恰好を尋ねると、「巡礼の姿をしている」とお弓が答えたところで、十郎兵衛は気づいてしまう。亡くなったのは実の娘だったのだと。布団の中で冷たくなった娘を見つけたお弓は、なぜ殺したのかと十郎兵衛をなじり、「あの時ここに留めておけば、こんなことにはならなかった」と娘を抱いて激しく嘆き悲しんだ。

やがて二人を捕まえるため、捕手たちがやってきて家を取り囲む。お鶴の亡骸を火葬するため戸や障子を重ねて火をつけると、二人は南無阿弥陀仏と手を合わせて、徳島藩へ戻るために逃げ別れていったのだった。

旭座人形芝居本公演 おたのしみ抽選会

- ・ご来場の方には演目の終了後、おたのしみ抽選会をおこないます。
- ・応募できるのは公演当日の会場内のみです。
- ・氏名を記入の上、演目が終了するまでの間に、会場内に設置した応募箱に投かんして下さい。(必ず、ふりがなを記入して下さい)
- ・応募はお一人につき一枚までとなります。複数枚応募されても、2枚目以降は無効となります。
- ・抽選時点で会場内にいらっしゃる場合、当選は無効となります。

キリトリ線

応募券

(ふりがな)

(姓)

(名)